論　文 ニダバ (*Nidaba*) 41(2012), 61-70

迪慶州香格里拉県中央域カムチベット語（建塘／小中甸／格咱方言）の方言特徴

鈴　木　博　之

1 はじめに

本稿では、雲南省迪慶藏族自治州香格里拉県中央部を中心に話されるカムチベット語方言数種を対照しつつ、チベット文語（蔵文）対応形式の面から方言特徴を考察する。

1.1 議論の背景

迪慶州のチベット語諸方言のカムチベット語における大枠の位置づけは、瞿霽堂・金效静 (1981)、張濟川 (1993)、格桑居冕・格桑央京 (2002) などの先行研究において異なる主張がなされていた。そこで筆者は実際複数の方言資料を用いてそれらを検討し、その全体像を鈴木 (2008b) において提示した（最新の見解は鈴木 (2010:233, 262) を参照）。その中で香格里拉県中央部で話される方言は、すべてカムチベット語の中の Sems-kyi-nyila 方言群に属し、大部分は rGyalthang 下位方言群に分類されることになっている。

Sems-kyi-nyila 方言群に属する方言では、これまでの研究において rGyalthang（建塘）方言が特に研究されてきた（Hongladarom (1996)、Wang (1996)、《雲南省誌》(1998:421-441) など）が、それ以外の方言は記述が進行中であるか、未記述であるかである。

実際鈴木 (2008b) などの議論では、蔵文と口語音との音対応を扱っているが、語形式の具体例がない。そのために本稿では、実際に具体例をあげて音対応を明確に示しつつ考察する。

1.2 本稿で用いる言語資料

ここで主に用いる方言資料は５種類である。北から順にあげると、香格里拉 [Sems kyi Nyi-zla] 県格咱[sKad-grag] 郷初古 [mTsho-mgo] 村の mTshongu 方言 (sKT)、香格里拉県建塘 [rGyal-thang] 鎮吉迪 [rGyal-bde] 村の rGyalbde 方言 (rGyD)、同鎮錯古龍 [mTsho-mgo-lung] 村の rGyalthang 方言 (rGyT)、香格里拉県小中甸 [Yang-thang] 郷吉念批 [Gyen-nye-'phel] 村の Gyennyemphel 方言 (YaG)、同郷期小谷 [Khyim-phyug-gong] 村の Khyimphyuggong 方言 (YaK) である。必要に応じて香格里拉県三壩郷安南 [A-la-ngo] 村の Alangu 方言 (Ala)、香格里拉県小中甸郷吹窪丁 [Chos-ba-steng] 村の Choswateng 方言 (YaC) にも言及する。すべて Sems-kyi-nyila 方言群 rGyalthang 下位方言群に属する方言である。( ) 内の表記は以下の議論で用いる略称である。

各種方言資料は、筆者自身の調査によって得たものを用いる。主な調査協力者はそれぞれ(sKT)：ヤンツォ・ドマ [gYang-mtsho sGrol-ma] さん、(rGyD)：劉三妹さん、(rGyT)：テンジン・ゾンモ [bsTan-'dzin bZang-mo] さん、(YaG)：ヨンゾン [gYang-'dzom] さん、(YaC)：ロゾン・チューチ [Blo-bzang Chos-skyid] さんである。調査は2005年から2011年にかけて各郷、建塘鎮および昆明市で行った。

2　音体系の素描

以下にrGyalthang方言の例を掲げ、本稿で扱う他の方言との異なりを注記する。

【音節構造】最大で $^{C}C_{i}GVCC$、初頭子音が鼻音のときCCVCCもある。

注：音節末子音が２つ存在する場合、最後の１つは必ず/ʔ/である。

【声調】語声調で、¯：高平、´：上昇、`：下降、ˆ：上昇下降の４種。

【母音】下記各要素について長短・鼻母音/非鼻母音の対立が存在する。

ɿ/ʅ i		ɨ		ɯ u
e		ə ɵ		ɤ o
	ɛ		ɔ	
	a		ɑ	

/ɿ-ʅ/は実質１つの音素であり、調音時に強い舌の緊張を伴い、方言によっては軽い咽頭化の特徴を帯びる。この音素は存在する方言と存在しない方言がある。

/ɤ/は存在する方言と存在しない方言がある。

/ɯ/は開口度の大きい変異音 [ɜ, ʌ] が認められる。方言によっては/ɜ/と記述する。

【子音】子音連続に現れるものも含めた一覧、子音連続は主として前鼻音と前気音がある。

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p^h	t^h	$ʈ^h$	c^h	k^h	
	無気	p	t	ʈ	c	k	ʔ
	有声	b	d	ɖ	ɟ	g	
破擦音	無声有気		ts^h	$ʈʂ^h$	$tɕ^h$		
	無気		ts	ʈʂ	tɕ		
	有声		dz	ɖʐ	dʑ		
摩擦音	無声有気		s^h	$ʂ^h$	$ɕ^h$		
	無気		s	ʂ	ɕ	x	h
	有声		z	ʐ	ʑ	ɣ	ɦ
鼻音	有声	m	n		ɲ	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɲ̊	ŋ̊	
流音	有声		l	r			
	無声		l̥	r̥			
半母音		w			j		

以上に示した子音音素のうち、硬口蓋閉鎖音/c^{h}, c, ɟ/は前部硬口蓋破擦音 [tɕ^{h}, tɕ, dʑ] で発音されることがある。ただし、Gyennyemphel 方言や Choswateng 方言、Alangu 方言では、硬口蓋閉鎖音と前部硬口蓋破擦音は厳格に対立するため、このような現象は見られない。

なお、/r/は（後部）歯茎接近音 [ɹ] で実現される方言と（後部）歯茎ふるえ音 [r] で実現される方言とがある。

3 蔵文との音対応から見る方言特徴

蔵文と口語との音対応を探る作業は、口語の発展を分析する重要な手段である。迪慶州香格里拉県中央域のカムチベット語は、先行研究においてよく知られるチベット語方言には見られないいくつかの特徴がある。

3.1 蔵文足字 y, r および蔵文 c/ch/j/sh/zh をめぐって

まず、蔵文足字 y, r の対応形式を取り上げる。口語形式として蔵文足字 y, r が基字とともに音変化を起こし、その結果調音点の異なる破擦音や摩擦音が成立しており、これらの口語形式が蔵文に基字としてもともと存在する c, ch, j, sh, zh などの口語対応形式とどのように合流するかという点が方言差異を分析する手がかりになる。この手法はすでに鈴木 (2008ab, 2009a) などで実践されている。

蔵文 Ky の対応形式

語義	sKT	rGyD	rGyT	YaG	YaK	蔵文
あなた	ˋtɕ^{h}ʉʔ	ˉtɕ^{h}ʉʔ	ˋtɕ^{h}ʉʔ	ˋtɕ^{h}ʉʔ	ˋtɕ^{h}ʉʔ	*khyod*
漢族	ˏ^{ɦ}dʑa	ˏ^{ɦ}dʑa	ˏ^{ɦ}dʑa	ˏ^{ɦ}dʑa	ˏ^{ɦ}dʑa	*rgya*
酸い	ˆsʉː kwa	ˏ^{h}tɕwoː kwɤ	ˋ^{h}tɕoː ɕa	ˏ^{h}tɕwoː	—	*skyur po*
幸せな	ˏ^{h}tɕiː pə	ˏ^{h}tɕiː pɤ	ˏ^{h}tɕiːʔ pə	—	—	*skyid po*

いずれの方言でも基本的に前部硬口蓋破擦音に対応する。なお、香格里拉県中央域のチベット語方言では、蔵文 sky-についても前部硬口蓋破擦音で現れるのが通例といえる。sKadgrag 方言の「酸い」の例は *skyur po* 対応形式でない可能性がある。

蔵文 Py の対応形式

語義	sKT	rGyD	rGyT	YaG	YaK	蔵文
裕福な	ˉɕ^{h}ɔː bə	ˉɕoː bɤ	ˉɕ^{h}oʔ bə	ˉɕ^{h}ɔː ^{ɦ}bo	—	*phyug po*
鶏	ˊɕa	ˊɕa	ˊɕa	ˊɕa	ˊɕa	*bya*
狼	ˊɕɔ̃ ɕ^{h}ɯ	ˉɕõ k^{h}ɯ	ˉɕõ tɕ^{h}ɯ	ˉɕɔ̃ tɕ^{h}ɯ	ˉɕɔ̃ c^{h}ɯ	*spyang khi*
暖季	ˏ^{ɦ}jəː k^{h}a	ˉʑiː k^{h}a	ˉʑəː	ˉʑə	—	*dbyar kha*

いずれの方言でも基本的に前部硬口蓋摩擦音に対応する。

蔵文 Kr の対応形式

語義	sKT	rGyD	rGyT	YaG	YaK	蔵文
血	ˋtɕʰɑʔ	ˉtɕʰɑʔ	ˉtɕʰɑʔ	ˋcʰɑʔ	ˋcʰɑʔ	*khrag*
ナイフ	ˊtɕə ɖʐõ	ˊtɕə ɖʐõ	—	ˊcə ɖʐõ	—	*gri chung*
髪	ˉʰtɕa	ˉʰtɕa	ˉʰtɕaː	ˉʰca	ˉʰca	*skra*

基本的に Gyennyemphel 方言では硬口蓋閉鎖音が、その他の方言では前部硬口蓋破擦音に対応する。

蔵文 Pr の対応形式

語義	sKT	rGyD	rGyT	YaG	YaK	蔵文
がけ/岩	ˊɕɑʔ	ˊɕɑː rɜ	ˋɕʰɑʔ	ˊɕɑʔ	ˊɕɑʔ	*brag*
細い	ˋɕʰa ʰtse	ˊɕʰe ʑa	ˋɕʰe ri	ˉɕʰə ʰtsi	—	*phra po*
雲	ˉɕĩ	ˉɕĩ	ˉɕĩ	ˉɕĩ	ˉɕĩ	*sprin*
蛇	ˋᵐbɯ ʑʉː	ˊʑʉː	ˊʑʉʔ	ˉʑʉ	ˉʱɟʉ	*sbrul*

いずれの方言でも基本的に前部硬口蓋摩擦音に対応する。ただし Choswateng 方言では硬口蓋摩擦音に対応する。蔵文'br については、一部の方言で硬口蓋破擦音として実現される。

語義	sKT	rGyD	rGyT	YaG	YaK	蔵文
龍	ˀᵇdʑɔʔ	ˀᵇdʑɔʔ	ˀᵇdʑɔʔ	ˀᵇɟɔʔ	ˀᵇɟɔʔ	*'brug*

蔵文 dr の対応形式

語義	sKT	rGyD	rGyT	YaG	YaK	蔵文
6	ˋʈɔʔ	ˋʈuʔ	ˋʈoʔ	ˋʈɔʔ	ˋʈɔʔ	*drug*
鬼	ˉha ⁿɖʐɤ	ˉxa ⁿɖɤ	ˋxa ⁿɖɤ	ˉha ɳɖə	—	*'dre*

いずれの方言でも基本的にそり舌閉鎖音に対応するが、sKadgrag 方言のように一部破擦音に対応する例も認められる。

蔵文 c/ch/j の対応形式

語義	sKT	rGyD	rGyT	YaG	YaK	蔵文
水	ˉʈʂʰɯ	ˉʈʂʰɤ	ˉʈʂʰɯ	ˉʈʂʰɯ	ˉʈʂʰɯ	*chu*
大きい	ˊʈʂʰɤ wo	—	ˉʈʂʰẽ	—	—	*che / chen*
茶	ˊʈʂa	ˊʈʂa	ˊʈʂa	ˊʈʂa	ˊʈʂa	*ja*

いずれの方言でも基本的にそり舌破擦音に対応する。少数の例ではそり舌閉鎖音に対応するものも認められる。

蔵文 sh/zh の対応形式

語義	sKT	rGyD	rGyT	YaG	YaK	蔵文
肉	ˉʂʰa	ˉʂʰa	ˆʂʰa	ˉʂʰa	ˉʂʰa	*sha*
木	ˊʂʰĩ pʰõ	ˊʂʰẽj pʰõ	ˉʂʰẽj pʰõ	ˊʂʰĩ pʰõ	ˉʂʰẽj pʰõ	*shing phung*
帽子	ˊʂə wa	ˊʂwa	ˊʂwaː	ˊʂwa	ˊʂwa	*zhwa*
4	ˉʱʐə	ˆʐɜ	ˆʱʐə	ˊʱʐə	ˊʱʐə	*bzhi*

いずれの方言でも基本的にそり舌音摩擦音に対応する。

以上の特徴について、確かに蔵文との音韻対応が見て取れるが、対応関係が異なる例も少なくなく、本来的な対応関係と借用語など非本来語の対応関係とが混合している可能性に注意が必要だろう。

対応関係のうち代表的な口語形式をまとめると、以下のようになる。参考として、Alangu 方言と Choswateng 方言の事例も添える。

tɕ（前部硬口蓋破擦音を代表）、ɕ（前部硬口蓋摩擦音を代表）、ʈ（そり舌閉鎖音を代表）、ʈʂ（そり舌破擦音を代表）、c（硬口蓋閉鎖音を代表）、ʂ（そり舌摩擦音を代表）

蔵文形式	sKT	rGyD	rGyT	YaG	YaK	YaC	Ala
Ky	tɕ	tɕ	tɕ	tɕ	tɕ	tɕ	tɕ
Py	ɕ	ɕ	ɕ	ɕ	ɕ	ɕ	ɕ
Kr	tɕ	tɕ	tɕ	c	c	c	c
Pr	ɕ	ɕ	ɕ	ɕ	ɕ	ç	ɕ
dr	ʈ/ʈʂ	ʈ	ʈ	ʈ	ʈ	ʈ	ʈ
c/ch/j	ʈʂ	ʈʂ	ʈʂ	ʈʂ	ʈʂ	ʈʂ	ʈʂ
sh/zh	ʂ	ʂ	ʂ	ʂ	ʂ	ʂ	ʂ

以上のことから、香格里拉県中央域の諸方言における異なりは蔵文 Kr および Pr 対応形式に現れるといえるだろう。

さて、以上で触れなかった蔵文足字 r を含む形式に sr-がある。この各方言の対応は、以下のように基本的に足字 r の脱落と分析できるが、前気音を伴う点が特徴的である。

語義	sKT	rGyD	rGyT	YaG	YaK	蔵文
命	ˋʰsuʔ	ˋʰsuʔ	ˋʰsuʔ	ˋʰsuʔ	ˋʰsuʔ	*srog*
薄い	ˋʰsə ʰsɔʔ	ˋʰsɤ ʰsuʔ	ˋʰsoː bje	ˋʰsɔː pe	—	*srab srab*

3.2 蔵文 l と蔵文 y をめぐって

香格里拉県中央域のいずれの方言でも、蔵文 l：口語形式/l/および蔵文 y：口語形式/j/という規則的な対応が認められる。ただし周辺の方言では対応がこの通りでないものが見受けら

れるため、この特徴も明示しておく必要がある。また、蔵文 zl は/ˡ⁽ⁿ⁾d/に、蔵文 lh, sl は/l̥, ˡh/に対応する。

蔵文 l（基字および足字）の対応形式

語義	sKT	rGyD	rGyT	YaG	YaK	蔵文
年	ˊlo	ˊlɤ	ˊlo	ˊlo	ˊlo	*lo*
水牛	ˋtʂʰɯ ʱlɔ̃	ˉtʂʰɯ ljã	ˉtʂʰɯ lẽ	ˉtʂʰe ʱlɔ̃	—	*chu glang*
風	⁻ʱlɔ̃	⁻ʱlɔ̃	⁻ʱlɑ̃	⁻ʱlɔ̃	⁻ʱlɔ̃	*rlung*
月	ˊⁿdə wa	ˊⁿdɜ wa	ˊⁿda wɑ	ˊⁿda wa	ˊⁿdə wa	*zla ba / zla dkar*
靴	ˉl̥ɔ̃	ˉl̥ã / ⁻ʰl̥ã	ˉl̥ã / ⁻ˡhã	ˉl̥ɔ̃	ˉl̥ã	*lham*
簡単な	ˊleː l̥a	—	ˊnɯ ˡha	ˊleː ˊl̥a	—	*sla po*

蔵文 y の対応形式

語義	sKT	rGyD	rGyT	YaG	YaK	蔵文
字/本	ˊji dʑə	ˊjiː dʑɤ	ˊji dʑə	ˊji dʑə	ˊji dʑə	*yi ge*
花椒	ˋʱjeː wɑ̃	⁻ʱjeː wã	⁻ʱje wɑ̃	—	—	*g.yer ma*
暖季	⁻ʱjəː kʰa	ˉʑiː kʰa	ˉʑəː	ˉʑə	—	*dbyar kha*

一部の語で/ʑ/に対応する例が認められるが、例外とみなすことができる。

3.3 蔵文足字 w をめぐって

迪慶州のチベット語の中には蔵文 *wa zur* が/w/として実現される方言がある。

語義	sKT	rGyD	rGyT	YaG	YaK	蔵文
帽子	ˊʂə wa	ˊʂwã	ˊʂwaː	ˊʂwa	ˊʂwa	*zhwa*
草	⁻ʰtsə wa	⁻ʰtswa	⁻ʰtswa	⁻ʰtswa	⁻ʰtswa	*rtswa*

以上の対応関係は蔵文 *wa zur* をもつすべての語に現れるわけではないことに注意が必要である。

3.4 前舌狭母音に先行する蔵文歯茎阻害音字の対応形式

香格里拉中央域の方言において蔵文 ts, tsh, dz, s, z およびそれに先行する子音字を伴う例について、後続する母音が前舌狭母音であるときに、その対応初頭子音が前部硬口蓋音になるという現象が認められる。この種の対応は、蔵文の母音が前舌狭母音 *i, e* である場合もあれば、口語形式が前舌狭母音/i/で実現されるものにもまた見られる。以下に例をあげる。

語義	sKT	rGyD	rGyT	YaG	YaK	蔵文
狼	ˊɕɔ̃ ɕʰɯ	⁻ɕɔ̃ kʰɯ	⁻ɕɔ̃ tɕʰɯ	⁻ɕɔ̃ tɕʰɯ	⁻ɕɔ̃ cʰɯ	*spyang khi*
明るい	ˋʰsiː to	⁻ʰsiː	⁻ɕiː bu	ˊʰɕiː tɕa	—	*gsal pa*
美しい	⁻ⁿdziː wu	⁻ᵑʥiː bɤ	⁻ᵑʥiː ba	⁻ᵑʥiː bo	⁻ᵑʥiː bo	*mdzes po*

rGyalbde 方言の「明るい」や Khyimphyuggong 方言の「狼」などのように、方言および語によっては前部硬口蓋音以外の対応を示す例もある。

3.5 蔵文 o#をめぐって

ほとんどのカムチベット語では、蔵文の開音節語に対応するものについて、蔵文 i#, u#についてそれぞれ/i, u/ではなく/ə, ɯ/に対応する。中にはさらに o#について/o/以外に一部の例において/wə/または/ɤ/に対応する方言もあり、以下にようになる。

語義	sKT	rGyD	rGyT	YaG	YaK	蔵文
歯	ˉsʰwə	ˉsʰɤ	ˉsʰwə	ˉsʰwə	ˉsʰwə	*so*
年	ˊlo	ˊlɤ	ˊlo	ˊlo	ˊlo	*lo*
娘	ˊpõ mo	ˊpo mɤ	ˊpo mõ	ˊpo mo	ˊpo mo	*bu mo*

蔵文 o#の対応形式は語によって異なることに注意が必要で、一般化は難しい。

3.6 蔵文後置字 r を伴う例

蔵文後置字 r を伴う例は直前の母音の質が大きく変化することがある。

語義	sKT	rGyD	rGyT	YaG	YaK	蔵文
バター	ˊmɵː	ˊmoː	ˊmoː	ˊmɯː	ˊmoː	*mar*
金	ˋʰsɵː	ˋʰsɻː	ˋʰsɻː	ˉsʰɻː	ˉsʰɻː	*gser*

/ɻ/は特に舌の筋肉の緊張が高まり、場合によっては微弱な咽頭化を伴う点に特徴づけられる。

3.7 古蔵文に対応する口語形式

迪慶州のチベット語の中には古蔵文に対応する口語形式をもつものがあることが知られているが、以下にその言及に当てはまる例を掲げる。

語義	sKT	rGyD	rGyT	YaG	YaK	蔵文	古蔵文
目	ˋʱn̥iʔ	ˋn̥iʔ	ˉn̥iʔ	ˋʱn̥iʔ	ˋn̥iʔ	*mig*	*dmyig*
火	ˋʱn̥ɜ̃	ˊn̥ɜ	ˆᵐn̥ə	ˉn̥ə	ˊn̥ə	*me*	*mye / smye*
～でない	ˊn̥i	ˊn̥i	ˊn̥i	ˊn̥i	ˊn̥i	*mi*	*myi*
ない	ˋn̥̊eʔ	ˆn̥eʔ	ˆn̥eʔ	ˊn̥eʔ	ˊn̥eʔ	*med*	*myed*
虹	ˉʐa	ˋⁿdʐa	—	ˋʱʐa	—	*'ja'*	*gzha'*

以上に掲げた語形式は、個別の語を除き、いずれの方言においても古蔵文との関連が見出される。

4　蔵文対応形式に関するいくつかの考察

これまでに見てきた特徴について、香格里拉県中央域の各種方言間での共通性と異なりをまとめ、類型的観点からの考察を加える。

まず、**3.1** で取り上げた諸形式について、音形式の特徴は建塘鎮を含む北部と南部の方言群に大きく二分することができる。後者は前者より硬口蓋音の音対応の面でより複雑な対応関係を示している。いずれの音素も特定の蔵文とよく対応するため、音体系の複雑なほうがより古い特徴を示していると考えることができる。これについて Suzuki (2011) が次のように音変化を整理している。

蔵文		第１段階		第二段階
Kr	>	/c/系列	>	/tɕ/系列
Ky	>	/tɕ/系列		#
Pr	>	/ʂ/系列	>	/ɕ/系列
例外：*'br*	>	/ᵐʒ/	>	/ᵐdʑ/
Py	>	/ɕ/系列		#

また、上表の硬口蓋閉鎖音系列は硬口蓋摩擦音系列に比べて保持されている方言が多いといえる。この特徴について香格里拉県中央域の周辺に分布する諸方言と対比すると、さらに興味深い特徴が浮かび上がってくる。それは、香格里拉県北部に分布する Sems-kyi-nyila 方言群に属するそれぞれ独立した下位区分を形成する２つの方言 Lamdo（浪都）方言および Phuri（普上）方言は、いずれも小中甸郷で話される方言のように体系的な硬口蓋閉鎖音をもつ方言群で、その蔵文との対応関係も並行関係にある。また、香格里拉県西部に分布する雲嶺山脈東部下位方言群に属する Nyishe/Jiangdong（尼西江東）方言でもまた硬口蓋音系列が体系的に存在し、Choswateng 方言と同様硬口蓋摩擦音もまた存在する、もっとも複雑な体系を持っている。このような分布をみると、Sems-kyi-nyila 方言群においては、建塘鎮を中心として、そこから離れれば離れるほど古態的な特徴を示していると見え、あたかも方言周圏論が適用できそうな分布を示している。

次に、**3.2**、**3.3**、**3.5**、**3.7** で扱った特徴はいずれも Sems-kyi-nyila 方言群に属する周辺の方言と大きく異なるものではない。しかし Lamdo 方言および Phuri 方言では蔵文 l, y にそれぞれ/j, ʑ/が対応する点で異なる。

3.4 で扱った前舌狭母音に先行する蔵文歯茎阻害音字の対応形式が前部硬口蓋音になるというのは、本稿で扱った以外では Melung 下位方言群に属する Daan（大安）方言に認められる（鈴木 2009b）。いずれもナシ語圏と接している地域で話される方言である。系統的というよりはむしろ地域的な音変化と見ることができるかもしれない。

3.6 で扱った蔵文後置字 r に関連する例は、類型的に見て注意が必要である。まず、香格里拉県中央域の諸方言には２つの特徴があるといえる。１つは母音の円唇化の特徴を示すもので、本稿で扱った方言全体に当てはまる。もう１つの特徴は特定の初頭子音と組み合わさっ

た時に舌の緊張を伴う/ɿ-ʅ/に対応するもので、中央域の南部に分布する方言に顕著に認められる。この２つの特徴はチベット語全体を見渡しても極めて少数派の対応関係である。前者の特徴はLamdo方言およびPhuri方言、雲嶺山脈東部下位方言群に属する諸方言とも共通しないため、香格里拉県中央域に独自の特徴であるということができる。後者の特徴は中央域の南部に分布する方言に限られるわけではないが、舌の緊張の度合いを考慮すると南部の方言では緊張が強いことがいえる。これと酷似する発音をもつのがナシ語三壩方言であり（鈴木2011）、その関連から考えると、ナシ語がチベット語音の発展に何らかの影響を与えた可能性があるかもしれない。

5　まとめ

迪慶州香格里拉県中央域の諸方言は、確かに蔵文対応形式の観点から見て１つの下位方言群を形成していると考えられる多くの共通する特徴をもっている。また、方言差異の中に歴史的発展を見てとることができる要素もあり、その分布の観点から方言周圏論を思い起こさせるような状況を示している。一方で、特定の地域に偏った特徴的な現象もあり、これを言語接触による影響と考えることができる可能性を提示したが、より詳細な分析は今後の課題とする。

参考文献

Hongladarom, Krisadawan (1996) Rgyalthang Tibetan of Yunnan: a preliminary report. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* Vol. 19.2/Fall, 69-92

格桑居冕 [sKal-bzang 'Gyur-med]・格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2002)《藏語方言概論》民族出版社

瞿霭堂 [Qu, Aitang]・金效静 [Jin, Xiaojing] (1981)〈藏語方言的研究方法〉《西南民族學院學報》第３期 76-84

鈴木博之 (2008a)「迪慶州瀾滄江流域カムチベット語（徳欽/雲嶺/燕門/巴迪方言）の方言特徴」『ニダバ』第 37 号 115-124

―― (2008b)〈迪慶藏語是康巴藏語中的“一個”次方言嗎〉《康定民族師範高等専科學校學報》第３期 6-10

―― (2009a)「迪慶州金沙江流域カムチベット語（奔子欄/尼西/拖頂/霞若/其宗方言）の方言特徴」『ニダバ』第 38 号 29-38

―― (2009b)「納西文化圏のチベット語・永勝県大安 [Daan] 方言の方言所属」『国立民族学博物館研究報告』2009-34 巻１号 167-189

―― (2010)「カムチベット語香格里拉県浪都 [Lamdo] 方言の方言所属」『国立民族学博物館研究報告』2010-35 巻１号 231-264

——(2011)「チベット・ビルマ系言語から見た「緊喉母音」の多義性とその実態」『言語研究』第 140 号 147-158

Suzuki, Hiroyuki (2011) *Development of prepalatal and palatal articulations in Khams Tibetan spoken in bDechen Shangri-La (Yunnan).* Paper presented at 17th Himalayan Languages Symposium

Wang, Xiaosong (1996) Prolegomenon to Rgyalthang Tibetan phonology. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* Vol. 19.2/Fall, 55-67

《雲南省誌》編纂委員會 [Yunnan Shengzhi Bianzuan Weiyuanhui] (1998) 《雲南省誌　59 少数民族語言文字誌》雲南民族出版社

張濟川 [Zhang, Jichuan] (1993)〈藏語方言分類管見〉戴慶厦等編《民族語文論文集—慶祝馬學良先生八十寿辰文集》297-309 中央民族學院出版社

[付記]

筆者による現地調査については、平成 16-20 年度科学研究費補助金基盤研究 (S)「チベット文化圏における言語基層の解明」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 16102001)、平成 19-20 年度科学研究費補助金特別研究員奨励費「川西民族走廊・チベット文化圏における少数民族言語の方言調査と地域言語学的研究」および平成 21-23 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A)「ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 21251007) の援助を受けている。

なお、現地調査に当たっては昆明市の瑪吉阿米・香格里拉藏族風情宮の関係各位の協力を得た。ここに記して感謝の意を表する。